

御門々々へ駈往て、若し火消番衆被參候とも、加賀守手勢にて火消申候間、御入被成候には不及候と斷申入、公儀の衆入申間敷と被申付候。火消衆道迄被參候得共、最早火鎮り被歸候。二十一日公方無御異變五丸に被成御座候間、諸大名可有登城旨申來る。公にも御登城。是にて江戸中鎮る。

二十一日頃より辰口御邸燒跡に假番所出來、團七兵衛・中川八右衛門・宮井太郎右衛門・熊谷又八・川勝木工・生駒伊兵衛・多羅尾六兵衛等十二人勤番。但豎迄。夜は御徒衆足輕等泊候て番衆は罷歸候。然處小松より爲御横目稻垣長兵衛來る。此者六かしき心入のものと何も氣遣す。如案今枝民部迄長兵衛申聞候は、辰口御番衆代無之、御番所を明て罷歸候。有間敷儀也と云。民部も少し行當り、夜は不入所故に、明て罷歸候様に我等申付候由答之。此儀長兵衛は不及言上候處、御徒横目の内より遠御馳、十二人の番衆不殘閉門、稻垣長兵衛は御改易に成候。關原記

一、足輕細井彌左衛門の功名

天正年中鳥越の時、佐々方より倉知猪之助横山外記家來者知と、惣左衛門兒也と、此方より上坂九左衛門といふ者細道にて鎧を突合、互に胸

板に突當張合ひ、鎧の柄弓の如く成て何方へも引がたし。其時金澤方の足輕細井彌左衛門と云もの、鎧下をくゞり倉知と組て谷へ轉げ落たり。後は互に別れくゞに成。但彌左衛門組さまに下敷ケツクはづれを一刀さす。倉知是にてよわりぬるを、彌左衛門終に首を取る。此功にて御知行被下御小姓に成る。

一、神谷信濃の茶道

神谷信濃守は高德公の御小姓立にて、無類にしをらしき人也。茶道を數寄ぬ。微妙公或時信濃を始めて四五人御茶被下、公御路次迄御出被成、御敷居を御拂ひ、何もへ御挨拶候て御入被成候。信濃座上にて敷居をいたゞきて入る。公御覽ありて御感じ也。其後台徳殿下。微妙公以下御茶湯の節、右の首尾に被遊候。公方扱もくゞ肥前は珍敷事をいたされたりとて、殊の外御感に付、その儀を公へ御尋の方有之候處、神谷信濃に習ひたりと仰けるよし。湖池大徳記

一、生田四郎兵衛、加藤清正と鎧を合す事

微妙公へ本阿彌光佐或時申上候。私儀加藤肥後守殿別て御目掛られ候。賤ヶ嶽にて鎧の時、向より黒威しの武者鎧に

て來る。則是へ立向ふ。然れども間違ひして互に相近づく處に、右の方よりか様くゞの甲冑にて鎧を突かけたり。我等も鎧にて打拂たれば、鎧脇へのくゞ。指向たる敵ある故、右の方の敵には不辨、被黒威しと鎧を合し首を取所に、黒威しの家來と見え又敵一人來て突合て突立たり。後に聞けば黒威は拜郷五左衛門と云。其家來とみえたるは宿屋七左衛門と云。右の方より鎧を突たる者、其後何と成たる哉らん見

失ぬ。何者に候哉不知。若し右の様子前者あらば聞けと被仰候。當夏生田四郎兵衛方へ參候處、座敷に武器の虫干仕置候を見申候。清正御物語に少も不違甲冑御座候に付、四郎兵衛儀むかし勝家に奉公の儀承及候に付、清正御咄しの趣申候處、四郎兵衛申候は、紛もなく慥に我等にて候得共、今に成何として左様の事可申出哉と申候。御家中廣く御座候故、不思議の人多く御座候旨申上る。公何と思召候哉、兎角の御意無御座候旨、葛卷藏人其時分御小姓にて承り語る。

一、篠原出羽守の忠貞

慶長四年八月瑞龍公御入封、篠原出羽守越前金津迄御迎に出、則於金津驛御膳を可上とて用意す。公平生出羽守とは

御不快、右の様子御馳も被成候哉、金津にて直に御經過、出羽守失面目。而るに少も奉怨色もなく、急ぎ金澤へ走歸り、於金澤御城御着日の御膳を奉らんと用意す。公御快く御膳も被召上、其後より高德公御時のごとく被召使候。出羽は無二に忠貞又なき人と云。

一、篠原出羽守高石垣を築く

高德公、瑞龍公共に御留守の内、出羽守分別を以て堂形の方高石垣を築き、人持・馬廻・百姓・町人も加り築之。其頃は普請の珍敷時節故、百姓も町人も畏り勇て勤之。石は其頃今の本多安房守下屋敷並百姓町・保島村の邊に多有之、早速に出來す。高德公甚御感喜也。

一、龜田權兵衛殺害の徒黨

龜田權兵衛は、大隅守鐵齋が嫡子にて一萬石を領し、大男美談にて力量も人に勝れ、朝鮮軍・關原陣にも軍功あり。然れ共鄙吝無變の者にて人外の様にいへり。萬石の祿にても家來をば宅中に不置、女子の類迄を夜中も置たり。宅は今金森七之助向佐々木左兵衛宅地なり。或年十月風雨烈敷夜中、盜賊數輩入て權兵衛を刺殺し、財寶不殘取之。其様子